

市大山岳会ニュース

大阪市立大学山岳会

会長 大橋秀一郎

No.15

平成6年11月1日発行

編集：総務幹事 矢倉 睦

永田文康氏 追悼号

青春の情熱を山にかけ、
初冬の剣岳に逝った君
いつまでも
安らかに眠られんことを祈る。

永田文康君（享年22才）は1971年11月25日
剣岳早月尾根（2700m地点）にて表層雪崩
により池の谷側に転落して不帰の人となる。

1974年10月

父	永田	彰
母		延子
兄		元康

大阪市立大学山岳会

—— 馬場島 遭難碑より

「永田文康君を偲ぶ会」報告

福山昇二

日 時 : 平成6年10月8日(土) 3:00PM~

場 所 : 馬場島荘・剣岳青少年旅行センターキャンプ場

参加者 : 三島夫妻、小林(三島氏の知人)、川勝夫妻、藤本夫妻、上堂、
小笹、大堀(会友)、久保田、佐々木、藤村、山田、奥田(寛)、
大島、廣瀬、澤田、西村、福山、和田、竹中夫妻(会友)

<行動概要>

上堂氏、大島氏のマイカーに分乗し、早朝の大阪を出発。北陸道のS. Aで藤本車、名古屋からの久保田車、奈良からの藤村車と合流し、上市へ。ここで今夕のバーベキュー材料、酒類を購入し、馬場島・青少年旅行センターキャンプ場に3時頃到着。竹中夫妻、愛犬一匹、和田氏はすでに到着していた。途中、永田君遭難当時、馬場島荘におられた中村さんを訪ねるが不在であった。

早速、遭難碑を訪れ草刈り、清掃を行い当時のメンバーであった澤田氏がお経をあげ、同じくメンバーであった廣瀬氏が当時の状況を語り、参列者全員が焼香する。

夕方から、センターキャンプ場で大島支配人、西村コック長の指揮に従い、バーベキュー・鉄板焼き・鍋物の豪華メニューによる「偲ぶ会」を行う。各自、永田君の思い出、当時の捜索活動などについて語り合い、飲んで歌った。恒例のバンザイ三唱は三島大先輩の知人で、戦前に4峰正面ルートをトレースした小林女史(旧姓 長谷川)の音頭で行い、一応散会となった。遅れて、川勝夫妻また深夜に小笹、大堀氏が到着。

異常に暖かい秋の夜長、23年経った。いつまでも若いのは永田だけで、皆さん老けましたね。

<追悼山行報告>

参加者 上堂、山田、奥田、廣瀬、大島、澤田、西村、福山

10月9日 晴 キャンプ場7:35 — 早月尾根 1,000m地点8:45 — 1,600m
地点10:20 — 2,000m地点12:50 — 13:55早月小屋T S

重たい頭と胃袋を抱え、佐々木さんの作ってくれた雑炊を食べ、気合を入れてサアー出発。早月の急登に重い重いと言いながら奥田氏の背中には、ビールが1ケース。相変わらず元気な廣瀬氏の先導よろしく、ほぼコース・タイム通りに早

月小屋のテント場に到着。昔懐かしい池ノ谷、小窓尾根、剣尾根。先ずはビールで乾杯。山田氏は早速、高いびきの昼寝。

10月10日 晴のち小雨 TS 5:40 — 早月尾根 2,400m 地点 6:20 — 2,800m 地点 7:10 — 8:37 劔岳 9:18 — 11:20 TS

今朝も晴天、暖かい。永田君の遭難現場(2,800 m付近)で黙禱し、本峰へ。ここで福山は腹痛のためTSに帰る。その他は快調に本峰を往復。このまま下山も可能であったが、食料もあるし、休暇も取ったしの意見が多数を占め、もう一泊。昼から小雨模様になり、なかなか止まない。夕食は、小屋の土間を借りて行い、飲めない上堂氏、腹痛の福山に遠慮することなく、キッチリ酒盛も行った。

10月11日 小雨のち曇 TS 5:55 — 9:10 キャンプ場

小雨ながら降り続く雨の中、出発。最近では、登りより下りの方が膝にこたえてシンドイダヨと言いながら、それでもコース・タイムより早く、キャンプ場に到着。

富山で昔懐かしい「たっちゃん」で豚カツを食べ、「観音湯」に入った。懐かしい仲間に出会えたのも永田のおかげだな！

— 追悼文 —

久しぶりの早月尾根

(永田君を偲ぶ)

廣瀬秀雄

月日の経つのは本当に早いもので永田君が劔岳早月尾根で表層雪崩のため遭難してから早23年の歳月が過ぎてしまった。

OBの間で永田君を偲ぶ会を馬場島で行おうという話が出てきた時は、うれしくもあり、また遭難碑を訪れよう、いや訪れなければという気がありながら実現させていなかった自分だったので、何とも言えない気にもなった。

今回の山行中ずっと23年前を振り返っていたが、不思議なことに、出発時白萩川沿いで見たサルと、事故のあった時点しかどうしても浮かんでこなかった。小窓尾根をどうして登ったのか、三ノ窓からピークへはどうしたのか、全く思い出せない。

ピーク近くで泊まり、地吹雪の中出発、ずっとザイルを使用、緊張の連続の後、

あまりの吹雪のためツェルトを出して休憩したのをぼんやり憶えている。休憩後、私と澤田君でトップを交互にフィックスを張り、永田君を真中に下山し始めて2ピッチ目(?)、私がトップでザイルを延ばし、ハイ松でビレイ、永田君が下りてきたが、私のところまで来ていないのに、オーケー、オーケーと澤田君へ合図する声が聞こえた。地吹雪のため下を見ていたのでその声に気がつき、上を見るとまだ5～6m位で永田君がビレイをはずし、歩き始めようとしていた。ビレイをはずすな、はずすなと大きな声を出す、永田君には聞こえず、2、3歩歩き始めた時、彼の上部1、2m位の所より雪面が崩れ彼が流され始めた。こっちへ来い、こっちへ来いと叫ぶが彼には聞こえず、彼も必死にピッケルでストップしようとしているが、流れていっている雪の上なので効果なく、立ったままの状態、7、8m位流されたであろうか、そこから傾斜がきつくなっており、私の眼前から永田君の姿が消えていった。その姿が、23年たった今でも鮮明に脳裏に焼きついている。その日のうちに馬場島に下りれず、途中でビバーク、馬場島へは翌日の3時頃(?)に辿り着き、大阪へ連絡をした。翌日には早くも多くのOB、現役が馬場島に到着、搜索活動を開始したが、あいにく天候が崩れ、現場まで到着することができなく、全員下山した。

以上が23年経過した今の、事故に対する私の認識です。

久しぶりに早月尾根より劔岳のピークに立った今回の山行だったが、体力が弱くなっているのを実感した。馬場島のプリンセス、中村あきさんに会えなかったのは残念だった。

多くのOBの方々、他大学の山岳関係者他お世話になった方々に感謝申し上げます。又、今回偲ぶ会に参加して頂いた方々には、本当に有り難うございました。永田君のご冥福をお祈り申し上げます。

感想文

澤田宗博

「永田君を偲ぶ会」を、馬場島で行うとの連絡を受け、何があろうとも参加しなくては・・・と思ったものの、23年ぶりの山行・・・登山用具はあるのだろう

か？ 体力は大丈夫だろうか？ 少しは地元の大山を登ったりその近くを散策しているものの、登山という程のものではない。来たる日に備えて少しはトレーニングをと思い、靴ズレ防止のため登山靴をはいて数日間歩き、この山行に加わった。10月8日 大阪で上堂、奥田両先輩と待ち合わせ、車で馬場島へ向かう。伊折や馬場島付近はどうなっているんだろうと話しながら午後2時過ぎ現地着。46年事故で翌年5月に遺体捜索で池ノ谷に入山して以来だ。当時は小屋以外は何もなかったと思うが、今は10年程前に完成した2階建てのすばらしい小屋や、警察の遭難対策事務所(?)、キャンプ場設備、水洗トイレ等、全く見違えるほど良くなっていた。

三島大先輩等参加者約20名近く集まったところで、故永田君の遭難碑参りに出かける。碑が完成した時には来れなかったのが、初めて見る。場所は廣瀬さんが選定してくれたという、馬場島から白萩川へ入ること約15分位のところだった。大きな一枚岩にはめられたレリーフの前で、酒、果物、菓子、煙草をお供えして「般若心経」を読経する。お参りが終わったところで全員で記念写真。夜はキャンプサイトで歌い、飲み、語った。

10月9日 メンバー8人は、他の先輩に見送られて劔岳本峰をめざして出発。20kg程度の重量か、松尾平のような平坦部はよいが、それ以外の急な登りは重荷が辛い。2ピッチ目の終わったところで少し荷物を分担してもらう。少しは楽になった。足は前に出るが上に挙げる力がない。日頃の運動不足がこたえる。平均年令50才近いグループ、今日は早月小屋へ到着すればよい。天候は晴れ。とにかく無理をしないペースで登ろう。(当時 1,920m付近にあった避難小屋は、現在はなかった。)

1時過ぎ早月小屋へ到着する。2階建ての立派な小屋ができていた。小屋番の人に聞いてみると、46年のあの時の大雪で小屋が壊れ、翌年再建されたとのこと。(当時の記録を読むと47年5月はまだ古い小屋でした。)

早速、TSに3つのテントを張って、奥田さんが荷上げしてくれた缶ビールに舌つづみを打つ。実に最高。眼前に小窓尾根が険しく見える。早月尾根は大きく、長く、本峰はまだ見えない。遭難当時の11月28日、救助隊はこの小屋に入り、翌日事故現場へ行く計画だったが、29日・30日共に猛吹雪のため2,600m付近で引き返している。懐かしい苦い思い出が脳裏をかすめる。

10月10日 今日は「体育の日」。全国的に晴れることが多い。今年も、その通り素晴らしい天候となった。ラーメンの朝食を終え、アタックザックだけの軽装備をして出発。荷物が軽いと足取りも軽い。これなら劔岳ピークは大丈夫だ。2,600mのピークを越える頃から、遭難事故現場はどのあたりだっただろう・・・

と周辺を見回しながら登る。雪の有無でルートも光景も異なる。2,700m付近の池ノ谷側を登ると、事故現場と思われる場所に着く。上部は多少緩いが下は池ノ谷側へ真っ直ぐ落ちていく沢となっている。廣瀬さんと話し合ってみると、ほぼこの付近だろう、ということで8人全員が池ノ谷側に向かって黙禱。（澤田は読経する。）

（記録によれば、47年4月30日、山田・澤田両名で、5月29日廣瀬・田中（阪大OB）両名で現場を確認し、赤旗を残している）

ここで福山君の体調芳しくなく、一人TSへ下山する。残る7人は快調にピークをめざす。シシ頭、カニのハサミを越えると別山尾根へと出て劔岳ピークに到着。20数年ぶりのピークだ。ハツ峰、源次郎尾根また白馬岳、鹿島槍、立山連峰等、昔登った懐かしい山峰に話を咲かせ、1時間ばかりして下山する。

廣瀬さんと当時の事を思い出しながら下山。当時は積雪期なので稜線やルンゼがルートだった。再び事故現場へ近づき、周辺の状況からして、場合によっては3人共池ノ谷へ巻き込まれていてもおかしくないな！と心の中で思う。我々2人が、こうして生き残っているのは運がよかったのかもしれない。

当時のビバーク地の事等を回想しながらTSに到着。しばらくすると小雨となる。いい時に下山してきた。ともかく無事に追悼山行ができて一安心。

10月11日 小雨の中を下山。急な斜面を下るのは登り以上に足に負担をかける。爪先が痛い。ふくらはぎ、股が痛い。あの時も二人で黙々と馬場島をめざして下山したっけ。そう思い出しつつ馬場島へ到着した時は、目的を果たせた喜びともう歩かなくてもよいという解放感でいっぱいだった。

在阪の世話人の方々のお陰で、事故以来23年間ご無沙汰していた永田君のお参りが実現でき、心の中に何かひっかかっていたものが取れ、爽やかな気持ちになりました。今回の山行を企画していただき、厚く感謝致すところです。大変お世話様でした。

尚、参考までに当時の記録から抜粋して記す。

山行計画： 小窓尾根～劔岳～早月尾根

メンバー： 廣瀬秀雄、澤田宗博、永田文康

日 程： 昭和46年11月20日 馬場島～小窓尾根乗越（約 1,600m）

21日 TS～ドーム

22日 ドーム～三の窓

23日 三の窓～劔岳～早月尾根～下山

24日 馬場島～大阪

25・26日 スペア

行動記録：

11月20日	晴れ曇り	馬場島荘(10:15)～小窓尾根P S 1,800m (15:30)
21日	曇一時晴	T S (6:30)～T S (15:30)
22日	雪	沈澱
23日	快晴の曇	T S (7:10)～長次郎の頭(15:40)
24日	曇の視界悪く夜吹雪	T S (9:20)～劔岳本峰(11:20)
25日	吹雪視界悪し	T S (7:10)～シシ頭(9:45)～事故発生 (12:25)～B V 2,500m (17:00)
26日	小雪の曇	B V S (7:00)～馬場島荘(15:20)
27日		先発救助隊到着(8:45) 馬場島荘(12:45)～T S 1,700m (18:30)
28日	曇時々晴	T S (8:20)～避難小屋(11:20)～ 伝蔵小屋(13:20)
29日	吹雪	先発隊と後発隊伝蔵小屋に集結(9:35)
30日	吹雪	小屋(6:40)～2,600m (10:15)～小屋 (13:05) 小屋周辺は2 m以上の積雪となり、 吹雪の為搜索を断念する。
12月1日	雪	小屋(8:30)～避難小屋(11:40)～ 馬場島荘(17:05)
2日	快晴	入山以来初めての雲ひとつない快晴。全員下山。

以 上

早月尾根のこと

小笹 孝

「永田君を偲ぶ会」の集合日には1日遅れにはなるものの、Oと彼の愛車のG TRと共に、夜の北陸道を急いで馬場島を訪れました。

キャンプサイトには予定よりも早く1時間前に着き、二昔も前にお世話になっ

たテントを拡張、潜り込む。

「お就寝前の一杯」の心算が、「もうワンピッチ」「もうワンピッチで寝ましょうヨ」と思い出話を重ねるうちに、一升瓶が横になり、次いで我々もロウソクを吹き消して横になりました。

あの頃は、LL峰の『研究会』で一部のOBが毎週集まっていたものだった。研究会仲間のHと、現役のSと永田文康君との3人が初冬の小窓尾根、本峰、早月尾根ルートを予定した山行だったが、帰阪が少し遅れていた。

ほぼ同じ頃、Oと二人で早月尾根から本峰を往復して一足先に戻っていたMに、「今日明日の内に連絡が無ければ出られる用意を」と軽い気持ちで言い交わして、梅田で別れた研究会の翌日の夕方近くだった。『永田が消えた』ことを、冷静さを必死になって保ちながら伝えるHの声を聞いたのは。

現地での救援活動は事故発生の翌々日から開始され、早月尾根への捜索隊と、もし池ノ谷から自力脱出するとすれば小窓尾根を越えて戻るであろう期待から白萩川への収容隊との2隊に別れたものだった。

しかし連日の風雪に何の手掛かりをも得る事なく下山となり、翌朝馬場島から見る久し振りの太陽を実に眩しく感じたのは、お父さんのお顔を真っ直ぐにはとても見られないことへの言い訳だったのだろうか。

年が明け、雪解けを待ち兼ねて捜索活動が始まった。本当に大勢の人々のご助力を戴いたものだった。市大山岳会関係者は勿論のこと、探検部やAAVKの人達、富山県警の神保さんや馬場島荘の中村さんご夫婦、発電所等々々。

そして7月29日には、富高岩小屋の少し下流で、岩の間に挟まったアタックザックが見つかったのだった。

池ノ谷出合右岸の台地に建てたプレハブ小屋から富高岩小屋横のテントにベースを移しながら、6月1日から10月10日までの間ほぼ常駐して頑張ってくれた現役の力が大きかった。

Oにもずいぶん世話になったナー。プレハブ小屋等捜索用の資機材の荷上げに始まり、永田君を連れ去った雪崩の崩落ルートと推定されるルンゼや末端壁のト

レースまで本当によく助けてくれて有り難う。

「お互い山から大分遠ざかっているが、また登りたいナー」

「しかしこんな所でふらふらしている様ではアキマヘンナー」

ようやく秋の色が濃くなった白萩川を、甘い空気を胸一杯に吸いながら、今では少しだけ苦い思い出と共に歩んでいました。

ゲバルト・ローザ

和田城志

私が入学した年は学園紛争の最中で、私の学年には東大生は存在しない。市大も封鎖中であった。山岳部にも活動家はいたが、探検部のほうがもう少し過激だったようだ。永田は2回生の時探検部よりトラバークしてきた。探検部には学識豊かな文学青年が多くて、田舎者の私は少しコンプレックスを持った。永田からは今西ら京都学派の人々のことを教わった。

永田はヒョロ長い体軀で山男らしくなかったが、山のこと特にパイオニアワークやら登山史やらよく知っていた。セオリーを守り地道な登り方が彼の身上だったが、横でギャーギャー喚く岩登り狂の私がいたので、彼はきっと迷惑に思っていたにちがいない。下宿が同じだったのでよく議論もした。アルバイトも彼に紹介してもらって、それがそのまま仕事になった。会社設立時のメンバーは探検部出身者が多かった。彼も生きていたら同じ仕事をしていたかも知れない。いいリーダーシップを発揮していただろう。

彼は、我々の時代に君臨した名リーダー、後藤昌行とはタイプが違うが、静かで真面目で黙々と準備怠りなく物事を処していくという風であったので、ついにAAVKの委員長までやらされる羽目になった。表面上は私が派手に立ち回るが（実際、高難度の岩場荒らしで、関西では有名だったから）、背後で彼がしっかり岳連をたばねていた。私の毒気が強すぎたのか、我々の世代が過激過ぎたのか、この頃の岳連は目を見張る活躍をして、また軽く遭難をした。

夏合宿が終わって間のない頃、岳連のリーダークラスが集まって穂高岳で大々的な岩登りをやった。初日屏風岩に4パーティーが取り付いた。永田と私は東壁青白ハング緑ルートだった。東壁各ルートを我々は独占した。前穂東壁は雨で中止。滝谷へ散らばった。計画はクラック尾根から順次右へ時間の許すかぎり多く

のルートに登るというものだった。我々はドームまではやれると思った。ノーザイルでクラック尾根に取りつき、真ん中にいた副委員長の大宅（阪大）が浮石でB沢に転落、大ケガをしてこの合宿は終わった。

永田が遭難したのはその2ヶ月後だった。

永田はロシア語を第2外国語に取っていて、卒論は「ローザ・ルクセンブルク」だと言っていた。工学には善悪があり、理学にはないというように、商学には善悪があって経済学にはないと思っていたが、何となくマル経のほうに正義があるような気がした。永田は心情マルキストであったような気がする。私は金融業が社会経済を牽引する大切な役割を担っていることは認めるが、銀行、不動産屋、証券会社はあまり好きじゃない。永田が革命途上で倒れた女性闘士の何に惹かれたのか、単なる青年の感傷なのか、私の取るに足らない知識で埋められた腐脳では計り知れない。永田は堅実で素直な人間だったから、きっとローザの中に何か可能性を見つけていたに違いない。大学は静かになったと聞く。初秋の劔岳も静かであった。アルピニズムを過激に走り抜け、つまづいた彼もまたゲバルト・クライマーの一人であったかもしれない。当時京大で数学を勉強されていた兄君の元康さんに言われたことがある。「棺桶に足を入れる頃になってやっと道程半ばというような目標こそ本当の目標だ。山登りはどうだね？」

ウー 恥ずかしいなあ、人生半ばはとうに過ぎたのに未だ目標が見えない。

「山は性交みたいなもんや。理屈はいらんちゃうか。岩壁の緊張も幽谷の静寂も捨て難いなあ。」永田がポツリと弁護してくれる。

永田のラブストーリーを聞いたことがないが、幽明境に倒れば恥も外聞もあるものか、ローザにアタック、ゲバルト・ロマンスの華を咲かせてほしい。（だけど、永田のシャイは死んでもなおらんやろうなあ。）可能性を仕舞い込んだまま消えた君の方が得なことはあるかもしれんで。君は変わらないが、私は中身は別として外見は大いに変わった。頭がはげて腹が出て、フウフウ喘いでラッセルする姿は君には見せたくないなあ。

献 歌

緑青に 月日たどれば レリーフが 「ベルグハイル」と小さくつぶやく

君逝きし 雪溪閣に つかのまの 光りとどけや 紅葉の日暮れは

遠き日の 山に抱かれし 悲しさは いま山の辺の 清水にやどれ

不帰の 谷に添寝の イワカガミ 春待つ君と 何を語らん

亜麻色の 御櫓のいくすじ 頬にそい ローザを染めし 君が眼差し

くろべのやまひと
黒部山人

— 追悼山行 —

早月尾根にて

山田裕敏

夜半、ポツポツとテントを叩く雨音に目を覚ます。2日間の登高で疲労困憊とはいえ、昨夜は7時頃から消灯したのでもう充分なのか、なかなか次の眠りが来ず、うとうとと取り止めのないことどもが頭を過る。山での雨はいつもいやなものだ。今住んでいる福岡ではここ4ヶ月ほど雨らしい雨は降っておらず、1日12時間断水にあるので、晴天続きには辟易しているのに、久々に山に出かけて雨に会うとは何たる皮肉か。やっぱり山と雨とは付き物のようで、5月の大峰山、夏の大日越え、11月の白萩川と新人の頃の山の雨が想い出される。こういうことなら昨日の午後、もう一鞭も二鞭も打って下まで降りてしまったのに、今回のパーティーにS君の如き一気下山派が不在のためか、それとも永田君の遭難現場に近い所にもう少し居ておこうという気持ちが無意識に働いたせいか、同じサイトに2泊することになったもの。

そう、ここは早月尾根 2,200m。今夜の雨はやっと買ったダウンの寝袋に包まれて生暖かいが、23年前の11月末は風雪が烈しく吹き荒れる厳冬の山であった。東京から奥田（寛）と2人で駆けつけて胸までのラッセルの後、今は早月小屋と改名されたここ伝蔵小屋に何泊したのか忘れたが、吹雪が止まず、それらしい搜索も出来ぬままに下山した無念さが甦る。

昨日は1年の冬山以来31年ぶりに本峰を往復してきた。事故当時の3人パーティーのメンバーだった廣瀬、澤田の後ろを歩いていたのでよくわかったが、2人はその折りの記憶をさかんに辿り、現場を固定しようとするのだが、なかなか難しそう。漸くここだということとなり、いつも賑やかな大島、西村達も声を落とし、一同黙禱。山にはまだ雪が来ておらず、黒々と聳える小窓尾根に向き合って、足元の早月からの支沢が池ノ谷に落ち込んでいる。白いガレ場に紅葉が映える。

澤田師の読経が流れる。故人の人生と丁度同じだけの期間が過ぎたわけで、短いと言えば短かったが、各人各様にいろんなフィールドでメシを食ってきて、そろそろ白髪交じりとなってきた。永田君とは現役時代が違うせいもあって、こういう場ではつい他の人にも想いが及ぶ。桃山高校同期で関学OBの森本隆君。山で逝ったわけではないが、後藤正行君。泉さん、そして今年4月に亡くなった私の父親も。

後藤君とは卒業後も彼の ARRANGEで5月の穂高、白馬東稜、硫黄尾根、夏の柳又谷、10月の北岳バットレス等楽しませて貰った。「楽しかりしや去年の秋、美しかりしや春の宵」といった日々をいくつも共にした人間がもうこの世に居ないとはなんと淋しいことか。泉さんのご逝去はたまたまご末子の四郎さんが93年に香港の事務所にご来訪の折り、知らされた。今から60年も前の颯でのご活躍はどんなだったのだろう。一昨夜は馬場島での慰霊祭の後、81才の小林女史に往時の奥又でのお話を伺ったが、今度お目にかかる時には颯のこと、泉さんのことも聞かせてもらおう。

それにつけてもやることを沢山遺し永田君は若くして亡くなってしまったが、この辺のこととなると、西村の言うように、人それぞれに自分の寿命を持って生まれてきていると思えば少しは割り切れた気持ちになれる。彼の目に見えた、最後の行為であった、スリップの前にザイルからカラビナを外したことは、とても悔やまれて、いつも何故かと語り合うのだけれど、別の見方をすれば、後方の澤田君の追落を防ぎ、ひいては3人共の滑落の可能性を封じたとも結果的に考えられる由にて、何ともはや、ただ合掌と言った所である。そして人は生前にのみ何かをするものと思っていたが、死後もこうして我々をここに集めてくれている。あと25年程もすれば、命ある人々が慰霊碑前で50年忌を営むことであろう。

ここまで書くともうあらかた今回の山行をなぞってしまったこととなるが、序でに言えば、これは同期の連中も同意することと思うけれど、本山行の中心でもあったいわゆる戦後のブーマー世代の激しい突き押しに我々はずいぶん持ち上げられてきた。我々とは広く山岳会全体と言えるかもしれないが、そのブーマー達も「そろそろ年ですで、」と言っている。遠い国の山へ出かけるのもいいけれど、信州に山小屋をという時代でもあるらしい。この面でも、またブーマー達のエネルギーを発揮してほしいものだ。それにもう一度TOSONのBMWのハンドルを握り、150km/hの定常運転を味わいたいことだし。

末筆乍ら今回は大島君に助けられた。ありがとう。

朝食をすませてテント場に行くと、早月尾根組は出発した後だったが、前夜の宴の跡はすっかりきれいに片付いており、さすがに市大山岳会！と感心することしきり。前夜遅く到着された小笹、大堀さんと川勝ご夫妻と私ども夫婦の6人で10時前、白萩川上流に向かう。

取水ダムを過ぎてすぐ第1回目の渡渉。白萩川の水は透き通るように美しく、水温もさほど低くないのでスニーカーの私はジャブジャブと対岸へ。この日、新調の登山靴の川勝さんは上等の靴を濡らしたくないのと、奥様を安全に渡すべく適当な石を探してウロウロ。大堀さんの先導で快適な沢歩き。見上げると白萩川上流には剣の主稜線がガクガクと望め、もう少し紅葉が下がってきていれば最高なのにと残念がる。

高巻き1回の後、2、3度渡渉すると、もう池ノ谷の出合。はじめて見る池ノ谷。ここで永田さん始め沢山の方々が命を落とされたことを思うと胸が痛む。少し登って雷岩の前で昼食。馬場島センターで作って下さった弁当を楽しくいただく。

昼食後いよいよ小窓尾根の取付を登り出す。急坂で休む場所もないので黙々と登る。イワカガミの葉が斜面をおおっているので、6月初旬頃にはきっとピンクの花でおおわれるのでしょう。ブナの大木が黄色い葉をつけて、立派にでんと立っている。私はブナの木が大好きだ。

白萩川がはるか下の方に望める頃、やっと小窓尾根の端に着いた。今までよりは傾斜が幾分ゆるくなり、落葉樹の葉でフカフカの気持ちのよい道になる。

池ノ谷側ものぞけて滝が見えた。このあたりは小さなシャクナゲの群生地だ。永田さんの遭難の時には重い資材をかついで、このあたりから池ノ谷側へ降りて活動されたと聞き、大変だったことと思う。しばらく尾根を歩いたけれど時間切れで戻ることにする。落石にも気を付けて下る。

今まで靴を濡らさずに来られた川勝ご夫妻もここで遂に濡らす羽目になり、後はもうヤケクソでジャブジャブ。上等の靴は水が抜けにくく、さぞかし重かったことでしょう。

4時半頃馬場島センターに帰り、風呂をあびる。一日あたりを散策されていた三島ご夫妻、小林さん達と楽しい夕食。朝、センターのおじさんのとって来られた茸やむかごの天麩羅、山菜煮物、あえものとなかなかおいしい食事だった。

(藤本勇氏夫人)



比叡山・雲母坂から横川へ

川勝幸子

日 時 : 平成6年9月15日(木・祝日)

参加者 : 藤本 勇・光子、山辻英也、西村正男、川勝弘一・幸子 6名

コース : 修学院駅9:30-雲母坂-スキー場12:00~13:00-延暦寺-
玉体杉-横川中堂15:00-坂本16:10

叡電-修学院駅に午前9時全員集合。幹事の西村氏、開口一番「本日は敬老ハイクと言うことで・・・」。なるほど、全員顔を見合せ納得!! 一人でも若い人が見えないかと9:30まで待つが追加なし。いよいよ出発。音羽川にそってアスファルト道をしばらく行くとやがて雲母坂に入る。普段なら瀬音を聞きながらの山路のはずが、ここ2ヶ月間の雨不足と、その上相変わらずの真夏日で、汗が湧き出るように流れる。漱石の虞美人草の宗近さんが、へどを吐きそうだという甲野さんをせきたて、あれこれと人生談義をしながら登る様をかすかに思い出す。

やがてケーブル駅を過ぎスキー場へと出る。ここで昼食。早速缶ビールで喉をうるおし、たっぷりと休憩。四明岳へは遊園地を通って行くので省略する。やがて天をつくような鬱蒼たる杉木立の延暦寺の境内に入る。当初の根本中堂から滋賀里への予定を変更し、横川より坂本への道に行くことにする。尾根筋は標高750m位ではあるが、左に京都を右に琵琶湖を眼下にして、渡る風はまことに涼しく、2時間程の快適ハイク。途中、浄土院・玉体杉・横川中堂を経るが、誰一人として合掌する人なし。皆、無神論者? 何はともあれ、一目散に坂本に下り、鶴喜さんで打ち上げ大食い・大飲み-皆いたって健康!

敬老の日はもう少し先送りにして下さいとのこと。幹事様 お付き合いありがとうございました。

(川勝弘一氏夫人)

第2回バードウォッチングの会へのお誘い

- 日 時 : 平成6年11月13日(日) 午前10時集合
集合場所 : 京阪電鉄 交野線終点 私市(きさいち)駅前
コ ー ス : 私市駅ー土生川に沿って登り、獅子窟寺(昼食)ー参道を下山
ー大阪市立大学理学部附属植物園ー私市駅
持 参 品 : ①弁当(私市駅前では入手できません。スーパーマーケットは
ありますが、パン・牛乳・果物程度しか売っておりません。)
②天候に応じて雨具の用意
③双眼鏡
④植物園の園料 350円
駐 車 場 : 私市駅前に私営駐車場あり(1日 700円)
雨天の場合 : 当日、午前8時までに実行か中止か決定。
9時までに下記へ電話問い合わせ下さい。

島川 ☎07749-4-5047

西田 ☎0742-43-1431

<幹事 西田>



住所変更

会友、会員の住所変更をお知らせします。お手持ちの山岳会名簿を訂正くださ
るようお願い申し上げます。

<会友>

今西壽雄 ☎560 大阪府豊中市東泉丘4丁目3番3-1204号
TEL 06-846-0202

<会員>

八木信男 ☎565 大阪府吹田市山田東4-18 B-305
TEL 06-876-3818(変更なし)



小倉裕史（昭和56年卒）

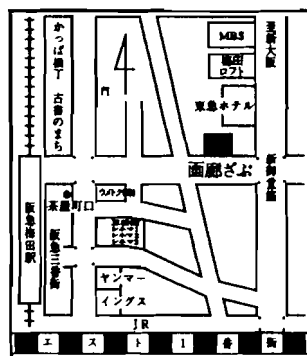
四光峰遠征の後、思うところあって木工の世界に足を踏みいれました。藤本先輩のご紹介により、比良の小屋でもおなじみの工芸家、徳永氏のところで勉強させていただいています。

この度、独立して仕事を始めるに当たって、作品の展示会を予定しています。手作りの家具やお盆などの小物を展示しますので、興味をお持ちの方はぜひご来場いただきますようお願い致します。

『小倉裕史 木の仕事展』

日 時 11月17日（木）～22日（火）
11：00～19：00 最終日は17：00まで

場 所 画廊 ざぶ
大阪市北区茶屋町 8 - 3
☎ 376-3278 374-5755
（阪急梅田駅 茶屋町口から3分）



* * * な・つ・や す・み・紀・行 * * *

北海道縦断夢想

和田城志

夏休みに8日間のオホーツク街道サイクリングをして、北海道の広大さの片鱗に触れた。宗谷岬から網走・知床・納沙布岬へ、原生の林、花園、湖沼、牧場、ほれぼれするような景色だった。陸地のみならず、オホーツクの海もまたこの風景を成り立たせる不可欠な役割を演じていた。

波打ち際を走れば、幾重にも岬が連なり、丘陵の上に青い海原がおおいかぶさってくる。牧場の奥の原生林をなめるように雲が流れる。左にブルー、右にグリーン、シンプルな風景の中ひた走る。

私はアルピニストだから、風光明媚はゲップが出る程見てきた。今さら名所を詣でたところで感動などしはしない。ただ走る。妻は、あの遺跡を見れなかったとか、ハマナスの花も時期遅れとか、北海道は6月じゃないとダメだとか、ああシンドイだけ、もっとゆっくり走ろうとグチばかり。

景色は見るものではない、創るものである。知床峠への急登の汗は国後の姿を化粧するためである。運悪く峠の眺望が濃い霧に閉ざされた時こそ、最も美しい国後島が現れる。そのためには快楽を薄めて味わってはならない。だからひた走る。

ヒマラヤの絶頂への負荷、雪黒部の深いラッセル、私は楽しく楽しめない。私は苦しく苦しまない。720キロの走行距離がゆっくり楽しみをにじみ出してくれる。急ぐことはない、競争ではないから。頑張ることはない、目標などないから。克己心？そんな大袈裟な信心はない。限り無く享楽に近いひとときへ少々まどろっこしい手段でアプローチしているのにすぎない。アルピニズムは何をやっても顔を出す。そして私はそれを好ましく想っている。

知床で一人のサイクリストに会った。日本中を1年8ヶ月走り続けているとのこと。44才、住所不定、独身、アルバイトをしつつ移動している。家財道具一式、底の破れた靴も捨てれずブラ下げ、コップ酒をぐびぐびやりながら、知床峠を自転車をついて登ってきた。「何故？」「今しかないと思った。」明るい好漢、現代の遊行聖であろうか。

帰路考えた。1976年2月、日高・ペテガリで死んだ名古屋大学山岳部員のことを。単独で襟裳岬より宗谷岬へ縦断を試み、遭難死する。ほとんど意味（世間的に言うところの冒険として）はない。ベンガル湾からエベレストまで歩いて登る時代、北極・南極・エベレストと3極到達の冒険も何人も成功している。シッキムからヒンドゥクシュまでグレートヒマラヤを東西に縦断した者さえいる。

しかし、冬の北海道分水嶺全山縦走が易しいかという、絶望的といっている程困難である。その大きい理由は、スケールの中途半端さにある。500キロもあるが犬ゾリは使えない。また使えるコースを走ったところで、それはただのドライブだ。中央高地以北はスキーで歩けるが、日高山脈主稜はワッパだ。極地のように大がかりな空輸デポをしなくてよいだけに、かえって近くの街へ下って食料を補給するのに抵抗がある。前もって峠々にデポを置くことになるだろう。

つまり、北アルプス冬山登山の方法で極地旅行をするようなものである。約80日はかかるだろう。3ヶ月弱の日数はちょうどヨットレースやヒマラヤ登山に近

い。しかし、それらが舟という道具や、組織（隊やポーターなど）のバックアップを受けるのと違って、全く己が身体のみでやらねばならない。

だから誰もやらない。しかし、岬から岬へ、冬の山稜を走破するというこのラインは非常に美しいラインである。この美しさは北海道の分水嶺をただ縦走するという単純さの中にある。「やるか?」「できるか?」「許されるか?」凍てついた湿原が、流水のオホーツクが、吹きすさぶ北見の丘陵が、そして、憧憬の日高山脈の連なりのかなたに、早春の襟裳岬が夢想されて仕方ないのである。

実を言うと、些細なことで社長と口論し会社をやめた。7年間と短かったが、楽しかっただけに残念だ。これで2つも会社を潰になった。14年間世話になった最初の会社（水江君が今頑張っている。）も時々思い出す。夢想とはこんな気分の時に湧いてくるようだ。それは逃げ口上だとも言われるし、妄想（被害?）だとも言われる。そうかもしれない。けれどもこの歳になって、山に逃げれるのなら、死ぬまで逃げれるだろうから、そうなるともう逃げていることにはならない。第一私の足では逃げてもすぐ追いつかれるだろうけど。

実に私の夢想には悲壮感がない。少々自信過剰なのかもしれないが、地図をみたり、プランを考えたりすると、仕事にも熱が入ってくる。酒も美味しくなってきた、人が懐かしくなってくる。弁解するつもりはないが、私は決して仕事が嫌いなのではない。山の方が少し余分に好きなのである。

また新しい環境と新しい人々に慣れていかねばならない。少々面倒臭いけど、ちょっと楽しみにしているのも本音である。

ああ、長々と万年山岳部員に相応しくない私事を喋ってしまった。次回はもうちょっと骨のある山行記録を書きましょう。

岩と雪に「劔沢幻視行」を発表します。ご一読下さい。

それから提案を一つ。

「市大山岳会ニュース」というネーミング、あんまり即物的でよくないんじゃないですか。「雪線便り」とか、「雪線の栞」とか、「雪線曼陀羅」とか、我等が部のシンボルを使った新しい名前を考えたらどうでしょう。

近況の想いにかえて

うなばらの汀に謫せし雪線の

越えなば知らる憂き身なるかも

ポレポレ（ゆっくり）バー ドツアー

—— 母なる大地アフリカを訪ねて ——

島川 勝・公子

—— アフリカへ

旅のきっかけはなんでもないことから始まる。藤本さんにアフリカはどんなところですかと電話をしたことが始まりで、1時間くらいアフリカの話を聞いて矢も楯もたまらなくなった。藤本さんは母堂とアフリカを旅行され、帰国されるのとすれ違いに我々は8月3日に出発した。

アフリカへはインド航空を利用したが、ボンベイに立ち寄り一泊してケニアのナイロビに着いた。ボンベイはインドの港町で美しいところと言われているが、最初のインドでの経験であったのでカルチャーショックを受けた。街に出れば、乞食がわんさと集まって来て落ちつかない。インドという国は一体何だろうと考え込んでしまう。

8月5日夕刻にナイロビ空港に着いた。涼しい。ナイロビは高度1,800m位のところにあり、夏でも5月頃の気候である。日焼け防止のつもりで持ってきた長袖シャツで丁度いい。旅行社のパトリックさんとこれからゆくサファリのドライバーのクレメントさんが迎えに来てくれていた。藤本さんから鳥の好きなドライバーさんを旅行社に頼んでおいたと言われていたが、クレメントさんが鳥に極めて詳しいことが後からよくわかった。藤本さんに感謝。

—— ナイロビからマサイマラへ

8月6日 早朝クレメントさんが迎えに来てくれる。近代的なビルのあるナイロビ市内を出て1時間も走ると眼下に見渡すかぎり広がる平原が見えてくる。これが大地溝帯（グレートリフトバレイ）だ。アフリカの大地が陥没していずれ大陸から離れてゆく。そこはなだらかで幅が30kmもあるという。目指すマサイマラ国立公園もこの大地溝帯の中にある。

クレメントさんはマサイマラへの凸凹道を砂ぼこりを立てながら猛烈なスピードでスズキのサファリカーでぶっ飛ばす。この草原が私のオフィスだと自信たっぷりだ。

車が進むと道のまわりでのんびり草を食べているシマウマやヌー（牛みたいなもの）がびっくりした様の一斉に走り出す。シマウマのお尻の縞模様がとてもきれいだ。「あそこダチョウさん」「キリンさん」「ゾウさん」とクレメントさんは車を猛烈なスピードで飛ばしながらはるか彼方の点のような動物でも見つける。「私の目はカメレオン」というだけあってとても目がいい。

—マサイ族

草原を牛を追いながら、真っ赤な衣装を身につけ背が高く、精悍な顔つきの男達とすれ違う。マサイ族だ。真っ赤な布をつけているので、草原ではすぐに見つけられる。「マサイの部落があるよ」と言われるが、どこにあるのがさっぱり見つけられない。草原のブッシュのあるところに何か低い小屋の様なものがやっと見つけられたのは、何回かマサイだと言われてからである。マサイ族の部落は牛の糞（プップ）と木で固めた小さい小屋が円形に立っていて、内は広場になっている。夜になると牛を広場に囲いこんで、ライオンに襲われないようにしている。マサイ族は牧畜だけをしており、牛の血を飲み頭に血を塗っているのだから一人で歩いていてもライオンは襲わないというのがクレメントさんの説明だ。

—鳥三昧

マサイマラ国立公園は動物も多いけれど、それ以上に鳥の種類が多かった。あごの下に赤い袋をぶら下げた真っ黒の鳥、目のさめるような鮮やかな紫の鳥、尾の長い鳥、ダチョウなど、カラフルで珍しい鳥がいっぱい、驚きの連続だった。クレメントさんは我々のトリ先生で鳥の名前を実に良く知っている。双眼鏡で鳥を見て直ぐ図鑑で確認する。クレメントさんは大抵肉眼で見つけその後我々が双眼鏡で確認する。時にはあれは自分も知らない鳥だと言って、双眼鏡を貸してくれと言って運転席から外に出て夢中になって鳥を見る鳥気違いである。クレメントさんが、出会う度に「私の愛人」と目を細めるとびきりのお気に入り、は、「ライラックローラ」といって首から胸のあたりがライラック色で、飛ぶとピンクと水色と紫色で夢のように美しい。毎日20種類の新しい鳥を見つける、それまでは昼飯なしとかいって鳥三昧だった。

—ゲームドライブ

サファリの朝は右手を軽く握って突き上げるようにして「ジャンボー（おはよう）」という挨拶から始まる。動物がよく見られるのは早朝と夕方であり、その時にロッジかサファリカーで草原に出てドライブをする。出発前に藤本さんからお借りした本に、ライオンの夫婦は1日に40回も楽しむと書いてあったのを見て、我々中年にとっては驚異的なことで是非事実を確かめたいと思っていた。ドライブで丁度その場面に遭遇したが、サファリカーが何台も囲むようにして見ているなかで、堂々と楽しんでいる姿はさすがライオンと思わせた。

草原では、ヌウの姿が到るところに見られる。我々が行ったときは丁度タンザニアからヌウが大移動する時期であった。マラ川沿いに夥しいヌウの死体

があった。大移動でマラ川を渉る時に、次々押し寄せるので、1頭が倒れると折り重なるように次々と川に倒れそのまま死んでゆくとのことであった。川に横たわるヌウの死体を秃鷹が貪りあたりには死臭が漂い、自然の摂理の厳しさを感じた。

サファリの期間中の宿はロッジとかキャンプとか呼ばれるが快適である。いずれも自然の中に建てられている。パラダイスマラロッジは特によかった。ロッジの前はマラ川が流れ、カバがプファアと泳ぎ、鳥が朝早くから音楽を奏でてくれる。食べ物は大丈夫なのかと心配されるかもしれないが、ハクナマタタ（大丈夫）。バイキング方式で肉、野菜、果物（スイカ、パパイヤ）が存分にあり、新鮮である。

—— ハクナマタタ（大丈夫）

サファリからナイロビに戻るとき、クレメントさんは我々に「今度は何時アフリカに戻りますか」と聞いた。アフリカは自然とともにあって、何か我々の遠い記憶を呼び戻すような喜びを与えてくれる。またアフリカの人々は素朴でネアカであり、また是非行きたいという気にさせる。旅行期間は8月3日から14日まで。旅行代金は夏であったので、航空運賃が1人22万、サファリ料金（車、宿ガイド代すべて込み）2人で20万位。黄熱病とコレラの予防注射が必要。

アフリカ旅行はハクナマタタ。

早朝ジュネーブよりSBB（国鉄）にて発つ。マルティニで登山鉄道に乗換えモンブラン山群の麓シャモニへ4時間の距離である。近代アルピニズムの発祥、1786年の医師パツカールとバルマによるモンブラン初登頂以後 200年余年を経た今、シャモニは登山基地と同時に一大保養観光地となった。

この地を踏むのは2年振り3度目であるが、今回はホテルを避け仲間とアパート一室を借りその日より自炊を始めた。

モンブラン山群はフランス・スイス・イタリアに亘る山の一大アーチで、広場のド・ソシュール銅像前より望めば、右に大雪を被ったドーム様の柔和な最高峰モンブラン、左は鋭く尖りきったシャモニ針峰群、名ガイドとして名高いガストン・レビュファの著書『星と嵐』の世界である。

彼は「地球と歳月の並はずれた創造物・・・地上の他のいかなる場所でも、地球がこれほど恩恵をほどこしたことはない。」と絶賛する。広大な氷河・天空に向かってそそり立つ無数の針峰、穏やかな湖、何もかもが時間にかかわりなく不思議な魅惑につつまれている。

夜9時を過ぎても表通りは明るく賑わいを見せている、部屋の方は登攀用具が一面に並ぶ。私達はルート図を広げ明日以降の山の選択に入るが、天候が下り気味で迷った。過去いくつかの針峰の登攀は経験していたが、ジョラスやドリユの6級クラスの岩峰は力不足で自力では手が出ない。

翌日、足馴らしにペイニユ峰パピヨンルートと決め、ケーブル駅ゼキーユよりアプローチ20分で登攀を始める。3～4級の比較的やさしい岩稜でフェース、チムニーと難無く登るが、危惧していた通りサンダーストームの到来で雨と雷に見舞われ、2時間後には途中下山となってしまった。

2日後私達はナシオンピーク（2,921m）としアンベール小屋へ向かうこととした。朝登山鉄道でモンタンベールへ。メールドグラス氷河を挟み真正面にし、ドリユを望むここは観光客の終着地で登山者の基点となる。この先2時間の氷河歩き、所々のクレバスは深く転落すれば無事には済まない。Z字型に慎重に進む。やがてグレボン峰上り、タキュル氷河に落ち込む稜線の僅かなテラスに山小屋を見つける。石造りの矩形で1階が厨房と食堂で2階が寝室である。アルプスでは山小屋はすべて山岳会の経営、アンベール小屋もフランス山岳会が運営する。会員は宿泊費が半額となる。私達も会員である。国籍等関係なく、写真と約8,000

円を持ってシャモニの事務所に行けば即時に会員証を手にすることができる。山岳保険付で、緊急時の救助隊やヘリの出動が記されている。日本山岳会とは遙か異なる。

今回初めてガイド同行である。アルプスでは通常残置ハーケンは無いと考えてよい。僅かに不安定なビレーポイントに1本あるか無いかである。初めての岩場では取付点を含め、ルートファインディングに多大の時間と労力を費やしてしまう。それを避けるのが主な理由である。

朝食後登攀用具の点検、他パーティーも身支度を終えている。山靴にアイゼン、ピッケル。取付点まで氷上と雪上を約30分歩く間、グランシャルモからナシオンに続く岩稜の岩壁は私を圧倒する。目指すジョージ5世ルートは頂上まで350m、難度5+〜6α。この1年、一の倉沢変形チムニールート一度しか登っていない私の心構えは、「慎重かつ果敢に」である。

フェイス&クラックのルートであった。早や2ピッチ目が6級、僅かなスタンス、ホールドで足先と指先に意識と神経を集中させる。細いクラックにはクレッターシューズの先端をねじ込むように密着させる。攀じる、確保、の繰り返しで捌くザイルも重く、腕力の無さを痛感するが、落ちる訳にはいかない。

岩に張りつき、ふと振り返ると、一極雄大で俊険なジョラスの北壁が迫って見える。そのウォーカー稜初登もヒマラヤと異なり冒険でも探検でもなく、また信仰との結びつきもなく、武装した騎士が、勇敢に立ち向かう如くの「挑戦」「探究」というものではないか。

更に、トラバース、ハングと歩を進め頂上すぐ近く、12ピッチを終えたところで雲行きが怪しくその急変を虞れ下降に入った。

小屋に戻ると間もなく雨となった。

5時からの夕食。テーブル毎にスープ、前菜、メインディッシュ、デザート、飲物とフルコース式でアルプスのハイジが順々に運んでくれる。料理も昨日と異なり、コーヒー・紅茶は随時自由である。私達は酒と山談義を夜更けまで続けた。

(島川勝氏同窓生)

ータイ国の山事情ほかー

伴 明

バンコックに単身赴任して3年半たち、そろそろ帰国の声が本社で囁かれている頃かなと思い始めた矢先、都合よく脳の「硬膜下血腫」という病気にかかってしまった。

軽い頭痛と風邪の症状が2ヶ月続き、風邪薬を飲んでもなおらず、その内に左足のマヒが出だして不思議に思い、病院へ行って脳のレントゲンを撮ってもらったところ、幅3cmの三日月型血腫が右側頭部にあるのが判明し、即日入院となった。

翌日日本へ飛んで帰り市大病院へ寝台車で運ばれ、その又翌日に手術を受けた。頭蓋骨に2ヶ所直径8ミリの穴をドリルで開けて血腫を吸引し、その後2週間の入院生活を過ごして、現在は完治した。

山辻先生、岡本館長を始め、山岳会の皆さんには小生の「都会の遭難」につき大変お世話になりました。紙上を借りて厚く御礼申し上げます。

病気の直接的な原因は、ゴルフ帰りにマッサージ店で頭をぶつけたことにあるのだが、主治医さん曰く「飲み過ぎですよ。長年一定量の飲酒を続けると50才過ぎの中高年によく起こる病気ですわ、まあこれを機会に少し酒量を減らしては如何。」振り返ってみれば、マニラ、ジャカルタ、バンコックと通算10年以上の駐在員生活の間、ビール、日本酒、老酒、ワイン、ウイスキー、ブランデーのどれかが喉を通らぬ日はなかった。最近も円高空洞化のお蔭で日本からの訪問客は、年間600人を越える始末。知らぬ内に日本に居る時に比べると2-3倍酒量は増えていたと思われる。

年内には日本に帰れとの本社の社長命令が出たので、帰国後はアルコールは少し「たしなむ」程度にしようかと反省している。

ところでタイの山の話をしてみたい。

タイ語では雪をヒマと言う。しかし現実に雪は降らないし、雪山そのものもない。たぶん大昔にサンスクリットの流入と共にヒマラヤのヒマが言葉だけ入ってきたのではないだろうか。

同様に山をカオ、又はドイと言う。タイにはカオヤイ（ヤイは大きい）が到る所にある。大きな地表のコブを「大山」と名付けたのであろう。しかしそれらカオヤイへの物見遊山、ハイキングはあっても、いわゆる登山、登攀、MOUNTAINEERINGの類はない。冬山登山とスポーツとしてのロッククライミングはどうやらなさそうだ。

バンコック市内のスポーツ用品店を片っぱしから調べたら、ようやく一軒の店でザイルと三つ道具を売っていたが、ザイルには埃が積もり、カラビナは錆びついていた。スイミングスクールを始めスポーツクラブは沢山あるが、「登山」に関するクラブや団体は皆無である。本屋にも登山用の地図やガイドブックは売っていない。官庁街のわかりにくいビルにあるタイ王室測量局には25万分の1の地図が1枚50バーツ(200円)で売っているが、タイ人でもこれを知っている人は少なからう。せめて大学山岳部でもと思って、当社のタイ人スタッフの出身校を調べてもらった。タイの東大と言われるチュラロンコン大、入試のないラムカムヘン大、山の多いチェンマイ大、いずれもない。

何故山岳部がないのか、どうして「登山」に関心がないのか、ヒマラヤが近いのに何故海外登山をしないのか、タイにはケタ違いの金持ちがいるではないか、などの質問にも答えがない。タイとは正反対の日本の山事情を説明すると、日本人は異人種だと言わんばかりの顔をする。

かかる理由をあれこれと考えてみた。まず当社のスタッフ（平均月収15,000バーツ、約6万円）のような典型的な都会人種は、しんどい、疲れる、危険な事は一切嫌がる。歴史的、伝統的な問題として、アニミズムや上座部仏教の盛んなタイで、これらと結びついた山岳宗教が何故発達しなかったのか不思議だが、それをベースにした宗教登山の伝統がない。

現実的には平均的気温が28℃と暑く、山の麓には毒蛇やヒルがウヨウヨいて、登山に適するシーズンは乾期の11、12、1月だけだし、アプローチが大変だ。美的な感覚で言えば、タイの最高峰であるチェンマイのドイ・インタノン（2,590mの頂上までバスで行ける）を始め雪がないこと、土色のチャオプラヤー川やチョコレート色のメコン川を見るまでもなく、タイ中の川が濁っていて清流がないことは大きなハンディである。

ともあれ、根本的な所で1) 経済が高度に発達し社会全体に余剰が生じるまでには至っていないこと、2) 都会生活のヒズミの解消と言うか、日常から非日常への脱却という意図が希薄であること、この二つの理由が大きそうに思える。

これではいかんと言う訳で、当社のタイ人スタッフ達に日常からの脱却を促し、多人数同時の有給休暇使用を認め、可能な限りでタイ僻地への登山を企画した。

ちなみに、当国においての僻地は4ヶ所あって、

- 1) 東はラオス／カンボジアとの国境で、ラオスとの国境はメコン川であり、山がない。カンボジアとの境にクメール遺跡で有名なカオ・プラヴィハーンがあるが、このあたりはボルボト派の拠点で地雷が恐ろしい。
- 2) 北はチェンマイの更に北方、GOLDEN TRIANGLEとして名高く、2,000m級の高山がかなりあるがアプローチが長すぎる。
- 3) 西はミャンマーとの国境で、2,000kmを越えると思われる国境線近辺には高山が多い。ただし地理的に不明な地域あり。
- 4) 南はナコンシータマラートの近くに1,835mのカオ・ルアンという南タイの高い山があって登ろうと企画していたが、共産ゲリラの残党が山賊化していて危険というので取り止めた。

山行その1 ウンパン国立公園

スタッフの1人が聞いたこともないツアー会社とコネをつけて、ガイド3名貸しテント11張を調達。家族、友人をいれ総勢23名、日本人は小生のみ、名誉隊長としてついてゆく。

1991年11月20日（水）

夜行バスで夜10時バンコック出発。7時間でミャンマーとの国境のメーソッドに着く。

11月21日（木）

朝6時、ホロ付き小型トラック2台で国境を南下。120kmのスピードですとばされ風の冷たさに凍え、地道のゆれで息つくヒマもない。どこを走っているのかわからぬ山道だが熱帯特有の赤土と疎林ばかりで変化に乏しい。12時、人口200戸位のウンパンという村に着く。ここでコックのオバサンと荷かつぎ炊事担当のポーター10名ばかり雇う。村はずれのメークロン川源流から2～3名ずつ荷物と共に竹を組んだ筏に分乗して川下りが始まる。同行のタイ人達は感に耐えぬ表情で両側の景色を嘆賞しているが、雲母や軽い泥砂が混じった川幅20～30mの濁流と、ワッサウと茂る暗緑色の熱帯性雨林に囲まれて何時間も流されていると気分が滅入ってくる。日本の赤石沢や上の廊下の変化に富んだ景観や清朗さとは全く違う。

午後4時半、日が陰ってきたので岸へ上り、無人の竹林のなかに我々一行のテントを張る。枯れ竹を燃料にして炊いたゴハンと香辛料のきき過ぎたトリと野菜等のゴック煮を食べてテントに寝る。

11月22日（金）

午前中筏を乗り継いで昼前に下船。トラックに1時間ゆられウンパン国立公園に着く。小型上高地といった風情だが、我々以外のパーティーはわずかで、牧場風の穏やかな景色が続く。20mもの高さのゴムの老木の疎林の中にテントを張る。

午後30分山道を歩いてティーロースーの大滝を見にゆく。幅100m、高さ10mはある滝が2段3段に分かれて瀑布状にかかっており、それも比較的透明に近く壮大な眺め。ここまでたどりついた距離、時間、苦労度からみてさしずめタイ国幻の大滝と呼びたい。裸になって滝ツボで泳いだら冷たくて震え上がった。

テントへ帰り着くとタイ人はそばの小川で水浴びをする。彼らは水浴びが好きで朝晩は言うまでもなく、汗をかくたびに水を浴びる。いちいち新しいシャツ・パンツに着替えるので荷物が多い。こんな山の中へ来て、気温も低いので着た切りスズメでいる小生を非文明人の如く見ている。夕食後ツアー会社の一人がギターを持ち出し、タイの国のメドレーが始まった。延々と果てし無く続くので小生一人先に寝てしまう。

11月23日(土)

朝8時の気温は15℃と寒い。この地域の25万分の1の地図が刊行されておらず、地図のない山旅のためどのように登っているのか不明。大滝への途中から山へ登り始め、竹林へ抜けてツル性の木々の間を登っていく。凝灰岩の岩場を過ぎ、小さなランの花を愛でつつ、ほぼ1時間程で1,700m位の無名の山の頂上に出た。ミャンマー、タイいずれとも知れぬ1,000-2,000m級のオリーブ色の山波がどこまでも続き、半透明の空気が淀んで暑苦しい風景だ。大滝がよく見えた。

午後テントを引き払い、小型トラックにこれでもかとゆられ続け、4時に再びウンパンに帰り着く。バラ、マリーゴールドが咲いていて長閑でのんびりとしたリゾート地風のコテージに泊まる。タイ離れのした別天地で風がさわやかだ。

11月24日(日)

4時半起床、トラックに20分乗った所で降り、ドイ・ファモッドという山へ御来光を拝みに登る。多少岩があるが、1,500m位の裸山で、細い登山道を伝って1時間ばかりかかって頂上に着く。折角の御来光は雲が多くわずかししか見えず。下山の途中で萩らしき花が咲いていた。往きと同様気の遠くなるほどトラックとバスに乗って夕刻バンコックに帰る。タイ人達の顔は長旅の疲れでぐったりしていたが、満足そうでもあった。

山行その2 プカドン国立公園

タイには熱帯植物は豊富だが「もみじ」を見たことがない、日本の黄葉紅葉は世界一すばらしいと自慢していたら、タイにも紅葉はある、お連れしましょうと

タイ人スタッフに誘われ、夜行列車に乗って「紅葉狩り」に行くことになった。ところはタイ国の真中より少し北のプカドン山、チンドン屋の囃子風ネーミングで覚えやすい。

1993年12月17日（金）

夕刻バンコックのファランポン駅へ11名が集まった。8時半タイの東北コンケンに向けて出発。今まで5、6度、冷房付夜行2等寝台車に乗ってタイの田舎の旅をしたが、とても安くて快適である。縦方向に2段ずつ並んだベッドはよく冷房がきいていて、枕、シーツも清潔、缶ビールやコーラ、パン、卵焼き等も売りにくる。ビールに酔ってぐっすり寝ている間にコンケンに着いた。

12月18日（土）

駅前にたむろする小型トラックと運賃の交渉、話がついてプカドン山めざし出発。西へ約150km走って、山麓の国立公園広場に到着。案内所、食堂、トイレなどがあり、案内所ではプカドン山域のルートの説明や動、鉱、植物の見本を展示、若いタイ人のハイカー達がたくさん群れていた。

この山は高さ1,288mで、富士山の胴を水平に切ったような台形をしており、登山路はひとつで麓の標高は200mゆえ、登るのに3時間ほどかかるらしい。9時半、さて登ろうとして登山口まで来ると入口に何やら注意書きのものが、英語とタイ語でかいてある。

PLEASE

DO NOT PICK UP WILDFLOWERS

USE LITTER CANS

HELP KEEP THE TRAIL CLEAN

TAKE NOTHING BUT PICTURES

LEAVE NOTHING BUT FOOTPRINTS

取るのは写真だけ、残すのは足跡のみ、とは洒落ている。六甲のような明るい山道を水筒とカメラだけ持って空身で登る。空身なのは我々だけでなく、全てのハイカーがそうである。登山口にはゴムゾーリばきの雲助ポーターが大勢いて、キロ当たり6バーツ（24円）で頂上まで荷物を担ぎ上げてくれる。誰も当たり前の顔をしてポーターに担がせる。しんどいことは嫌だというタイ人氣質が現れていて面白い。

3合目、5合目といった要所に茶店がよしずを掛けていて、水、コーラ、スイカ等の果物や菓子類を売っており、タイラーメン（一杯10バーツ）なども食べさせる。

竹林、雑木林、灌木類の茂み、岩場まじりのつづら折りが続き、空身のハイカ

ーと平均60kgの荷物を天秤棒で担いだポーター達が難多に行き交う。午後2時、頂上と言うか台地の東端に登り着いた。台地はほとんど水平で4km四方あり、一面に松の木が生えている。台地の中ほどにあるバンガローにチェックインし、付属の食堂でタイ料理をビールで流し込む。日が落ちるととたんに寒くなり気温は10℃。セーターを着てシュラフにもぐり込む。

12月19日（日）

6時に起きて、台地の西の端から谷間に下り、沢筋のハイキングを1日ばかりで回遊する。ガイドが1名先導してくれるのだが、地図はないし谷沿いの山道は所々ケモノ道のようにわかりにくい。途中で高さ20～30mの滝が4ヶ所あり、VIEW POINTになっているのだが、2つ目の滝のそばで始めて、大きな楓の木が血のように真っ赤な紅葉を散らしているのを見た。なるほど間違いなく紅葉で、カナダ国旗のメイプルツリーの三つ葉そっくりである。滝のそばや谷間にポツリポツリ、1日の内で20本も見ただろうか。およそ日本の山で見ることのない熱帯特有のシダやツル性の木々の暗緑色を背景に、血が滴るようにベタベタと赤いのは美しいというより少しばかり気味が悪い光景であった。台地から流れ出る沢は水量も少なく濁っており、川床の岩石は鉄色で軽石状の穴があいていた。

12月20日（月）

往きと同じ経路をたどって再び夜行寝台車に乗る。

12月21日（火）

早朝バンコックに帰着。タイの「紅葉狩り」、非日常の旅は脳裏に赤い葉っぱの残像を残して終わった。

△▽△▽編集後記△▽△▽

今回は皆様から沢山の原稿を戴き、内容深いニュースに仕上がりました。ありがとうございます。

永田氏の遭難について私共若い年代の者は、馬場島の遭難碑しか知らず、遠い昔の事のように感じていましたが、今回皆さんの原稿で、遭難時の状況、搜索の様子などを読み、身近に感じました。現役時代夏合宿で池ノ谷に入る度に、遭難碑に黙禱してきましたが、改めて永田氏のご冥福をお祈りいたします。

お仕事をやめられた方、新たな出発をされる方、皆様の発展をお祈りしています。もちろん自分自身にもそうハッパをかけています。 <編集 矢倉記>